

人生の

道しるべ

あなたの悩みに答えます

森本あんり

(東京女子大学学長)

一九五六年、神奈川県生まれ、プリンストン神学大学院博士課程修了(P.H.D.)。国際基督教大学教授などを経て、二〇二二年四月より現職。著書に「反知性主義」不寛容論(いずれも新潮選書)など。

写真:遠藤 宏

相談
戦争の理由、生徒にどう説明？

私は、都内の中学校で社会科を教えている教員です。

いま世界を混乱に陥れているウクライナ戦争に心を痛めています。子

どもたちに日本や世界の歴史を教える立場でありながら、まさかこのような事態になるとは思ってもいませんでした。

一方で、普段はそれほど授業に熱心ではなかった生徒が、「先生、な

んで戦争が起きていますか」と質問してくれることもありました。生徒が世界の出来事に関心をもつきっかけにはなっているのだと感じています。

ただ、私の答えが生徒にとって絶対的な回答に捉えられてしまう気がして、若干答えをぼやかしています。私の主観で軽々しいことは言えないし、生徒にはその疑問を問い続けてほしい思いもありますが、腑に落ちていないような生徒の表情を見ると、不甲斐なさも感じます。

教師がこんなことを他人に聞くのも憚られる思いですが、生徒の疑問にどう向き合えばいいのか、アドバイスをくださると幸いです。

(東京都、三十代、男性)

回答

ANSWER

今回はじつにタイムリーな相談内容です。ロシアのウクライナ侵攻ばかりではありません。国内でも、高校では四月から新しく「歴史総合」という教科が必修になったとか。きつと日本中で社会科の先生が同じような問いに頭を悩ませていることと

身の回りの温和な毎日とあまりに違う。けれども、同じようなことがいつか自分のところでも起きるかもしれない——そう感じている生徒の眼差しに、何とかして正面から応えたいと願う、良心的で熱心な先生だと思えます。

そんな先生が心配しておられるのは、自分の答えが生徒に絶対的なものと受け止められてしまうかもしれない、ということですね。

中学の社会科なら、いまの世の中を見て率直な疑問をぶつけてくる生徒もいることでしょう。どこか遠い昔の話で、現代社会には起きないだろうと高を括っていた戦争が、いきなり現実となり、しかもその無残な映像がリアルタイムで日常生活の中へと配信されてくるのです。

最初に嬉しく思うのは、この先生が生徒から全幅の信頼を得ている、ということですね。先生の言葉が絶対だと思ってくれるなんて、高校生ならたぶんありえない話でしょう。だからこそ、こんな羨ましいお悩み相談になるのです。

私は中学社会科という授業の詳細を知りません。学習指導要領の縛りもあるでしょうし、一つひとつの単元に費やせる時間数も限られているでしょう。

そもそも、大昔の自分の経験からすると、学校では現代史をやつてくれないので、いま起きている戦争の歴史的原因を探る、などという課題も難しいかもしれません。

私にも名案はありませんが、教員として学生の前に立つという点では、共通の課題に直面しています。その経験から、おそらく対象年齢にかかわらず、試してみてもいいと思うことがあります。

それは、一人二役の劇を演じることです。

まず一つの立場に立ち、そこから見える論理で結論まで出します。中途半端なところで止めるのではなく、論理も感情もフル動員して、しっかり追い込んでゆく。

生徒たちは圧倒され、途中で小さな疑問が浮かび上がることはあっても、ともかく同意せざるをえないでしょう。

そうやってクラス全体が納得しかけたら、今度はまったく反対の立場からそれを突き崩してゆき、同じように徹底して最後まで追求します。

「でも先生、さっきは全然逆のことを言っていたじゃないですか」と言われたら、その授業は成功です。

まず、みんなが常識的に納得できそうな議論を推し進めて「腑に落ち

る」経験をさせます。

次に、まったく別の面に光を当てて物事を見直し、自分のそれまでの常識が崩れてゆく経験をさせる。いったん「スッキリ理解できた」と思っていたことが、じつはまやかしかつた、ということに気がつく。

それが私の考える「よい授業」です。だいたいこの世の中に、すっきり理解できることなんて多くありません。

授業は問いを与えるところ

生徒たちは、対立するそれぞれの側に理由があることを学ぶと思えます。自分が初めから何となく近いと思っている立場にはすぐに同感できるでしょうが、それが反対側にいる

人にどう映っているか、ということにも気がつくと思います。

教師は、どちらの立場にも肩入れしてみせるので、中立とは言えませんが、授業全体からすると偏向してはいません（私が自分の授業に遅刻や早退を認めないのは、このためです。全部を聞けないなら、来るな。両方を聞いて考える時間をとれないなら、聞くな）。

人はどこかしらみな「偏向」しているものです。そして、人は誰でも「自分は絶対に正しい」と信じているものです。「中立」を装うほうが、よっぽどたちが悪い。

教師の意見が絶対ではない、というのを理解してもらうには、どっちつかずの結論ではなく、絶対的な

結論を二つ示します。そうすれば、どちらも絶対ではないことを、生徒たちはすぐに理解するでしょう。

教師の側にも入念な準備が必要になります。異なる思想間の対話には、何よりもまず教師自身の内面で対話ができているなければなりません。

だから一人二役です。「で、結局先生はどっちなんですか」と聞かれたら、「ご想像に任せる」と逃げましょう。

学校は、生徒がもついろいろな疑問に答えを与えるところではありません。そんな役割はネットの検索で十分です。

授業は、答えではなく問いを与えるところです。自分で答えを探した

くなるような問いを、生徒の内面に目覚めさせるところです。そうすれば、彼らは自分から喜んで勉強します。

「自分が問うてもいない問いへの答えほど、無用に思えるものはない」

——二十世紀アメリカの神学者ライオンホールド・ニーバーの言葉です。

もし学校の授業がつまらないとしたら、それは誰も尋ねていない問いに答えを与え続けているからでしょう。逆に、長い間どう考えたらよいかもわからずにぼんやりと問い続けてきた問いに、ある日ある時どこから、ピタリとくる答えが舞い降りてくる。

そのとき私たちは、答えとともに問いを理解するのです。

投稿要領

日常の相談事や悩みについて、400字詰め原稿用紙1枚程度で、住所、氏名、年齢、職業を記入のうえ（掲載は匿名）、ご送付ください。掲載分には、図書カードを進呈致します。原稿は、内容を損なわない範囲で、一部を修整させていただく場合がございます。原稿は返却できません。掲載分は電子メディアや出版物などで公開する場合がございます。あらかじめご了承ください。

宛先

〒135-8137 東京都江東区豊洲5-6-52 NBF豊洲キャナルフロント11階
株式会社PHP研究所 Voice編集部 人生相談係
メールでも投稿を受け付けております。

voice@php.co.jp